学生の主体性と思考力を育む、カリキュラムと教育方法の検討
―「現代社会の諸問題：東アジアの未来」を素材として

研究代表者　奥野恒久（政策学部）
共同研究者　中田裕子（農学部）
松浦さと子（政策学部）
妻木進吾（経営学部）
田口律男（経済学部）
手嶋泰伸（文学部）

１．はじめに

学生を、ただ教わる「客体」としてではなく、自分の考えや価値をもって、ときに社会の問題を自身の問題ととらえ、行動できる「主体」として育みたい。そのために大学での教養教育には何ができるのか。どうあるべきなのか。この問いに向き合おうとしたのが、本プロジェクトである。

2022 年度後期にオンライン開講される教養教育特別講義「現代社会の諸問題：東アジアの未来」の進行を意識しつつ、本プロジェクトでは 4 回の研究会を開催するとともに、メンバー間で活発に意見交換を行ってきた。今年度は、講義手法、とりわけオンラインでのグループ討論のあり方、問の発し方等に着目した。それら研究会の概要に触れたうえで、成果と課題について報告する。

２．2022 年度の活動内容

①2022 年 7 月 22 日　第 1 回研究会（和顔館 4 階会議室）

メンバーの自己紹介を行ったうえで、本プロジェクトの意図について奥野が説明し、意見交換を行った。その後、「東アジアの未来」という抽象的かつ理念的な問題に、学生をいかに引き付け当事者意識を促すか、という観点から本学所蔵のコレクションを用いる手法につき、村岡倫先生（文学部）から「混一疆理歴代国都之図」の活用について報告いただいた。歴史を学ぶ意義とともに、「東アジア」という広がりの中で考える意義についても意見交換がなされた。

②2022 年 9 月 21 日　第 2 回研究会（紫英館第 6 共同研究室）

手嶋泰伸（文学部）「近代日本のアジア支配」。今日的な問題を考えるにあたり、どの程度の基礎知識が必要か、という問題関心の下、手嶋先生から朝鮮の植民地支配と大東亜共栄圏について、歴史的概観がなされた。そのうえで、「朝鮮支配の実態と弊害」などいくつか事例を提示され、学生たちが議論をするテーマとして何が適切かにつき意見交換した。

次いで、オンライン授業にて学生の参加を促すことに成功している松浦さと子先生（政策学部）から、実践報告が行われた。オンライン授業とはいえ、学内で受講する学生がいることから、専用の教室を確保することや教育補助員の必要性などが確認された。

③2022 年 12 月 22 日　第 3 回研究会（和顔館 5 階会議室）

尾崎智子（農学部）「昭和 10 年代の”軍事流行”」。社会が戦時体制に向かっていくとはどういうことなのか。この問題意識の下、尾崎先生から昭和 10 年代にカーキ色の服の普及や流行という歴史的事実とそれがもたらした陸軍への好感度について報告いただいた。被服の流行に陸軍がどのように関わったのかを考えることは、映画や音楽、アニメやゲームといった娯楽が軍事と連関する可能性につき、学生たちの意識を触発するように思われる。

④2023 年 3 月 22 日　第 4 回研究会（キャンパスプラザ龍谷大サテライト）

重本直利（元経営学部）「平和状態の創設に向けての 5 つの論点」。「ウクライナ戦争」後、そして敵基地攻撃能力の保有や軍事費の大増額へと走り出した日本の現状を前提として、重本先生は、カントや安重根、日本国憲法の前文と 9 条を援用しながら、5 つの論点を提示された。そのうえで、「市民的国際連帯による安全保障」として「永世中立」を提起された。いま学生にぜひとも考えてもらいたい問題だけに、現状をどうとらえるか、学生たちに論点を提示するその仕方も含め、活発な意見交換がなされた。

また、2023 年のシラバスについての確認を行った。

３．本プロジェクトの成果

①2023 年度の授業計画（シラバス）の作成

1 回：イントロダクション（奥野恒久、中田裕子）
2 回：20 世紀初頭の東アジア（中田）
3 回：日本の戦争への道（尾崎智子）
4 回：安重根と浄土真宗僧侶とのかかわり（平田厚志）
5 回：龍谷大学所蔵大谷コレクションと東アジア（村岡倫）
6 回：近代日本文学と東アジアの関係（田口律男）
7 回：台湾問題（中田）
8 回：沖縄の歴史と現在（松島泰勝）
9 回：戦争責任（重本直利）
10 回：靖国問題（奥野）
11 回：ヘイトスピーチ問題（妻木進吾）
12 回：東アジアを取り巻く国際関係（八幡耕一）
13 回：日本国憲法の平和主義（奥野）
14 回：TBL 実践（まとめの討論）（奥野、中田）
15 回：東アジアの未来について考える（質問への応答等）（複数の担当者）

2023 年度も 2022 年度同様、前半では、20 世紀初頭の東アジアと日本の歴史を概観することで、時代状況を確認する。次いで、本学が所蔵する安重根の遺墨と混一疆理歴代国都之図を取り上げ、それを手掛かりに歴史を見ることで、学生たちが問題を「自分ごと」として考えることを促す。さらに文学を通じて、当時の日本の東アジアに対する目線について考えを深める。

後半では、いましばしば話題となる「台湾有事」を考えるため台湾の歴史について押さえる。次いで、沖縄の問題や、戦争責任の問題、靖国問題、ヘイトスピーチといった東アジアにかかわる今日的な問題につき、歴史的視点と知識を活用して考察する。加えて、国際学の視点から「東アジアを取り巻く国際関係」を押さえ、日本国憲法の平和主義の可能性について考える。14 回目は、PBL 実践としてグループに分かれて「東アジアの未来への提言」というテーマで議論し、それぞれのレポートに接続してもらう。

あと報道やメディアについても扱いたい。2022 年度に「ウクライナ戦争」をめぐる日本の報道を扱った講義のレポートに「私は、ロシアが 100 パーセント悪いようにメディアが取りあげているように感じていました。なので、あまり深く考えずにウクライナが被害者なのだと思いました。しかし、戦争が起こるまでの背景を見ると、もちろん攻撃をしたロシアは良くないですが、ロシアはロシアなりの言い分があることが分った」といった主張が数多く出された。マスメディアの報道にどう接するかは、考えておくべき課題であろう。

②主体性と思考力を育む

2022 年度の「東アジアの未来」に授業でも、グループ討論の時間をもつことで、他者の意見を聴くとともに自身の意見を述べる、さらには他者とのやり取りの中で自身の考えを深めることを試みてきた。

安重根の遺墨を手掛かりに、当時の安重根のおかれていた状況について考え、グループ討論を行ったあと次のようなレポートがあった。

「東洋の平和を訴え続けた韓国の独立運動家である安重根の遺墨が本学にあることは日本と韓国の和平の架け橋にもなりうると考える。若い方にも関心を持ってもらえるよう、分かりやすい形で日本と韓国は良好な関係を築くべきであると、訴えかけ続ける義務があると考える」。「安重根と言えばこれまでは、伊藤博文を殺した「悪人」としてしか教わってきませんでした。私はもっと当時の日本と朝鮮の関係性を踏まえて安重根という人物を捉え直さないといけないと思います。日本の教科書では、「安重根は伊藤博文を殺した人」としか教わりません。それでは歴史を学ぶ意味がないと思います。そうではなくて、安重根がなぜ伊藤博文を暗殺したのかだったりを当時の朝鮮の立場に立って考える時間なども必要だと感じます。したがって、安重根の遺墨は歴史の教科書に資料として掲載し、もっと深く植民地であった朝鮮の立場を考える一つの資料として活用できると思います」。これらから、歴史問題に主体的に関わろうとする姿勢がうかがえる。

徴用工問題を扱った回のレポートには、次のようなものがあった。

「戦時中に生じた日韓間の諸問題に関して、すでに日本側が韓国側に賠償金を支払っており解決済みだというように思っていたので、近年韓国の裁判所で賠償金の支払いを命令されたということにおかしいと思っていました。しかし、そもそも日韓協約が存在していなかった可能性があるなどの穴があるのであるとするならば、韓国の裁判所側の判断が正しいということになるので、日本側で報道されていることを鵜呑みにせず、自らでもっと関心を持たなければならないと感じました」。「本日の授業を受けて、正直話が難しかったので詳しく理解することができなかったのですが、自分が思ったことは今この問題を蒸し返してなんの意味があるのかなと感じた。確かに日本が朝鮮などにしたことは許されることじゃないと思う。だけど、その時代に生きていた人はもうほとんどいないのに、あくまでこの法律が適用されたとかいやこっちだという憶測で揉めているのは自分はとても馬鹿馬鹿しいことだと思うし、このままでは一生日韓の関係改善なんてできないと思う」。

この二つは、スタンスを大きく異にする。しかし、これまであまり考えたり論じたりしてこなかった問題について、正面から考える機会をもったがゆえの意見であろう。正面から取り上げる意味はあると考える。

主体性と思考力を育むための一つの試みとして、今年度私が行ったのは、「あくまでも一つの考えである」とことわったうえで、あえて自身の主張を正面からすることである。教育の場で、教員の考えを強要するというの絶対に許されない。しかし、教員が自身の主張をしっかり述べると、それへの賛成論・反対論含め真剣に考えられた意見が返ってくる。「両論併記」的な中立を装った講義でなく、教員も正面から主張を展開することが大学においては重要なように思われる。

４．今後の課題

①この授業に対する学生間の「温度差」

2022 年度、当初 150 人の受講生であったが、15 名が履修辞退をし、最終レポートの提出者は 89 名であった。履修辞退者の中には「扱う内容は興味深いが、あまりにも負担が重い」という声があった。毎回の授業への参加者も 80 名程度であったことから、本授業に「合う学生」と「合わない学生」の差が如実にあらわれた。最終レポートを見ると、「こ

のような難しい問題について、学生同士が議論をする授業が大学には必要」というコメントが複数寄せられたことから、最後まで頑張った 5 割強の学生は十分到達目標を達成したと思われる。

2023 年度に向けてであるが、「この授業は力のつく授業であるが、大変な授業である」ことをシラバスで強調することでまずは対応する。しかし、この学生間の「温度差」は引き続きの課題である。

②グループ討論への教員の関与

いうまでもなく、学生たちをただグループに分けてテーマを示し、例えば「15 分討論をして、その後で発表してください」というだけでは、なかなか成果は乏しい。「6 人のグループだったが、討論に参加したのは 3 人だけだった」。オンラインでの討論時に、「2 人、オンラインから落ちてしまった」、「ほとんど皆、沈黙のまま 15 分が経過した」といった指摘は、2022 年度にもあった。グループ討論の仕方について、初回の授業で、自己紹介などアイスブレーク、役割分担、時間の管理など、事前に一定のレクチャーを行ったが、リーダーシップを発揮できる学生がいるかどうかで、討論のレベルは大きく異なる。後半から、教員が学生の議論状況を見て回り、少なくとも「ほとんど沈黙」ということはなくなったようである。また、グループごとに役割分担や主な意見につきシートにして提出してもらうことは有効であった。

フィードバックを丁寧に行うことは重要である。グループ討論後の発表の後には、適切なコメントやアドバイスをすべきであるし、授業後のレポートや質問に対しても丁寧に応じる必要があろう。今後も、このフィードバックには力を入れたい。

③前年度からの課題について

2021 年度の「東アジアの未来」の授業にて、学生たちも現在、日本は近隣諸国と政治的に良好な関係にないことを踏まえたうえで、「国家という枠組みから離れて一人の個人として交流をしたい」という意見が出された。「韓国の音楽やドラマ、映画に関心がある」という学生は多い。「むしろ自分たちの親の世代が、韓国や中国に悪いイメージを持っているのではないか」との指摘もあった。「個人と個人として接したい」というのは、学生たちの素直な思いだと思われる。そこで、対面での交流が難しくても、オンラインでの交流の機会をつくることができないか、一つの課題としてきた。残念ながら、この課題についての検討はほとんど進まなかった。

将来的には、深草だけでなく、瀬田での開講も視野に入れている。オンライン開講であることから、それは十分可能であろう。教養教育改革全体の動きの中で、実行に移すことはできよう。

「東アジアの未来」の担当者に国際関係論・国際政治学の専門家にも加わっていただくことも、一つの課題としてきたが、2023 年度から八幡耕一先生に加わっていただけることとなった。

５．おわりに

「龍谷大学は、教養教育が面白い」と言われるような講義を、プロジェクトを通じて生み出したい、との思いから進めてきた。2021 年度、プロジェクト開始時に掲げていた課題は、以下の三つであった。①どのような知識・情報を提供すべきか、その順序はどうあるべきかを検討する。②学生たちには、どのような問題を問いかけるのが適切かを検討する。③ただ一方通行の講義ではなく学生同士が意見交換を行い考えを深めるには、いかなる手法があるかを検討する。そのさい、オンライン授業を活用することが有益なのか、さらに

は将来的に深草と瀬田との同時開講も可能なのかも検討する。

これら三つについて、議論も実践もそれなりに蓄積されてきた。このプロジェクトの目的も一定程度到達したといえよう。今後、他国の学生との交流を本気になって追求することはありえよう。また、素材や手法をさらに充実させ、教科書作成を課題にすることもありえよう。せっかくのこのプロジェクトで築かれた人的つながりを大切にしつつ、今後について議論をしていきたい。